

Guide to 20th Century

English and American Literature

E. HEMINGWAY

In Our Time

The Sun Also Rises

A Farewell to Arms

To Have and Have Not

For Whom the Bell Tolls

Across the River and Into the Trees

The Old Man and the Sea

The Snows of Kilimanjaro *Soldier's Home*

The Killers *The Butterfly and the Tank*

KENKYUSHA

20世紀英米文学案内 15

Ernest Hemingway

ヘミングウェイ

佐伯彰一 編

KENKYUSHA

20 世紀英米文学案内 15

ヘミングウェイ

装 幀 原 弘 (NDC)

1966 年 6 月 20 日 初版発行

定価 480 円

編 者 佐 伯 彰 一

発行者 小 酒 井 益 蔵

印刷者 小 酒 井 益 三 郎

発 行 所 研究社出版株式会社

東京都新宿区神楽坂 1 の 2
電話 東京 (269) 4521-5 番
振替口座 東京 83761 番

印刷 研究社印刷

美術印刷 大平舎

製本 新栄社製本

製函 加藤製函所

(落丁・乱丁本はお取りかえします)

目 次

人 と 生 涯 / 佐伯彰一	1
----------------	---

作 品

『われらの時代に』 / 武藤脩二	80
------------------	----

『日はまた昇る』 / 大浦暁生	92
-----------------	----

『武器よさらば』 / 出山桂吉	106
-----------------	-----

『持つと持たぬと』 / 邦高忠二	122
------------------	-----

『誰がために鐘は鳴る』 / 大井浩二	135
--------------------	-----

『河を渡って木立の中へ』 / 小島信夫	153
---------------------	-----

『老人と海』 / 磯田光一	160
---------------	-----

中・短編 / 中田耕治	173
-------------	-----

『午後の死』と『アフリカの緑の丘』 / 中村保男	193
評 価 / 佐伯彰一	213
年表・書誌 / 佐伯彰一・武藤脩二	卷末 1
索 引	卷末 35

人と生涯

弁解的なまえがき

四年前、ヘミングウェイの死後間もない頃、ぼくは『ヘミングウェイ伝』をめぐって』という小文を書いたことがある。まず、それを丸ごと引かせて頂く。

ヘミングウェイの伝記を物することは、きわめて易しく、また同時にきわめて難しい。易しいというのは、じつに個性鮮かな、体臭の強烈な人物であり、その生涯も劇的な挿話にみちいて、伝記作者の工夫をまたずして、おのずと一編のドラマを成しているからだ。難しいというのは、彼がすでに生前から「伝説」でありすぎ、既成のイメージの強力な枠内から脱け出すことが難しく、かつまた「伝説」と事実の境を見極めるのが難しかろうと思われるからである。

いや、ぼく自身が、ヘミングウェイの伝記を書くこととしてゐる訳ではないが、昨年の夏の急死以来、相ついで出た教冊を読み、今また実弟のレスター・ヘミングウェイ (Leicester Hemingway, 1915-) の回想記

『兄、アーネスト・ヘミングウェイ』(My Brother, Ernest Hemingway, 1962) を訳している際にまず浮かんだ率直な感想である。ヘミングウェイが読者の上に、いわば押しつけていた個性の刻印が、いかに大きく根深いものであったかを、改めて思い知らされた、といってもよい。どうやら、ぼくらは彼の作品を読みながら、すぐその背後に、作家自身の印象的な行動や肉体を読みこんでいたらしい。作家の個性や実生活と作品との関係といった、ややこしい一般論に今は立ち入るうとは思わぬが、この作家の場合、ぼくらが小説を読みつづ同時に人間を読んでいたことだけは疑えない。そこで、どの伝記作者よりも先に、ヘミングウェイ自身が、みずからの手で完結した「Life」を書き上げてしまっていた。今はほとんど自殺と確認されたも同然の急死に至るまで、彼自身の手で一切けりがついている。今さら何をつけ加え、書き直すことがあるうか、そんな感想がしきりと浮かんでくるのである。

大きに愛読者の感傷の仕業には違いないのだが、伝記作家によって、目新しい挿話を紹介されても、インタヴューの際の独特な癖を事細かに説明してもらって

も、こちらは、ああ、いかにもヘミングウェイらしい話だ、とうなずくに過ぎない。彼の未知の一面や本質が、鮮かに照らし出された、などという気には一向なれぬのである。ヘミングウェイの伝記作者は、彼自身がよほど強烈な体臭と偏見をそなえた人間であるか、それとも一切已を空しくして、あくまで客観的な、綿密精細な事実的記録を物するか、どちらかしは手はあるまい。つまりは、時間の経過が必要だ。まず時間が、彼の残した刻印を消し去ってくれなくては、といった身も蓋もない話になリかねない。

ヘミングウェイは、たしかにパーソナルな——広い意味で「自伝的」ですらあった作家だ。生涯の重要な出来事は、ほとんどことごとく作品化している。一九歳の夏の、あのイタリア戦線での瀕死の重傷からバリ時代の日々、闘牛、魚釣り、アフリカでの狩猟、急な病氣、またスペイン内乱での実地での見聞、第二次大戦における連合軍のノルマンディー上陸作戦への従軍と、ほとんどが小説中にとりこまれている。わが国の私小説作家の場合のような実生活密着と同一視してはなるまいが、ヘミングウェイにおける生活と作品との

つながりと照応は、ほぼ明白だ、といっている。しかも、彼は一見意外な場所にまで、パーソナルな出来事をもぐりこませているのだ。たとえば、『誰がために鐘は鳴る』の主人公のロバート・ジョーダンが、スペインの内乱のさなかで、自殺した父親のことを思い浮かべて「でも、いい事じゃないな。ぼくにも気持は判るが、是認する気にはなれない」といい、さらに「臆病者」とまで言い切る時、そのすぐ裏側に、『武器よさらば』執筆中に自殺した作者自身の父親の影をみとめぬ訳にはゆかない。さらに、同じ主人公の感慨として「彼が、臆病者だったというだけの話で、これは男として、これ以上ない最悪の不運であった。もし、彼が臆病者でなかったとしたら、あの女にしかと立ち向かって、むざむざ言いなりにはなっていなかったに違いない。もっと別の女と結婚していたら、どうだったろう、という気もするのだ……」といった箇所さえ出てくる。もちろん「彼」というのは父親で「あの女」は母親をさしている。いかにも露骨で強烈な言い方だ。もっとも、こうした箇所に、作者自身の感慨を読みとろうというのは、すでにこっちの方が、たとえば弟

のレスターが生き生きと語ってくれたヘミングウェイ家の家庭生活、肉親関係の描写に、かなり影響され出したせいかも知れない。一体あれほど「パーソナル」なこの作者が、生涯まったく触れなかったのは、彼の故郷のイリノイ州オーク・パーク (Oak Park) の町であり、そこでの彼自身の生活であった。短編集『われらの時代に』で描かれる主人公ニックの少年時代の挿話も、ヘミングウェイ家が休暇を過ごしに出かけたミシガン州ホートン・ベイ (Horton Bay) が中心で、オーク・パークは直接にはまったく姿を現わさない。また、第一次大戦から復員した直後の作者の心境を一番じかに反映していると思われる短編「兵士の家庭」(Soldier's Home) でも、舞台はオクラホマに移されている。その後の長い作家的生涯においても、ついに一度も故郷の町にはふれずじまいであった。シャーウッド・アンダーソンや、シンクレア・ルイスから、F・S・フィッツジェラルド、またトマス・ウルフにいたるまで、生まれ故郷の町への反抗、また脱出が、この時期のアメリカ作家共通の主題だったには違いない。だが、彼らのほとんどが、反抗や脱出の道筋を取り上

げることによって、それぞれの形で故郷を描き上げていた。そこで、ヘミングウェイにおける、これほど完全な沈黙は例外的といわざるを得ず、そこには何か異様なものさえ感じさせる。「修業時代のヘミングウェイ」に着目して、いわば作家以前のヘミングウェイを詳しく扱ったチャールズ・A・フェントン (Charles A. Fenton, *The Apprenticeship of Ernest Hemingway*, 1954) が、「余りにお上品だった」(more than respectable) とよび、「プロテスタント的で中流階級的」と規定し、さらに「これら一切の特徴に得々としている」と書いたオーク・パークの町に対する、根深い反撥、いや隠微な憎悪のごときものが、ヘミングウェイの無意識のうちにいぶりつづけていたのかも知れない。こうした執拗ともよびたい、長期にわたる、そしてはついに永遠の沈黙の理由の詮索は、後に来る伝記作者たちに委せておこう。ただこうした一貫した故郷嫌悪の心理的な根拠ともいふべきものは、弟レスターの回想記によって、ほぼ見当がつきそうだ。

アーネストは、六人きょうだいの二番目、姉一人に、妹三人と弟一人、その末っ子の弟がレスターであ

る。そこで、兄弟といっても、年齢が一六歳もひらいており、年齢の近い兄弟間につきものの心理的な葛藤、両親の愛情をめぐる競争心や嫉妬などは、まったく見当たらぬ。兄弟というよりも、父親と息子みたいな庇護的な関係である。弟から兄に借金を申しこんであつさり断わられるという話も出てくるが、概して、及びがたい年長者に対する素朴な讃嘆と甘えが基調になっている。中年以後、もっぱら「パパ」と自称し、そう呼ばれることを好んだらしいヘミングウェイの場合は、「父親コンプレックス」ならぬ「パパ・コンプレックス」だと誰かが冗談を書いていたが、この弟は、そうした庇護者気どりの兄貴とごく素直につき合っていたらしい。父親亡き後の長兄が、おのずと父親代りの役を演じがち、という一般的な事情も働きはしただろう。しかし、レスターの本に関する限り、この点が逆に、家庭におけるアーネストの姿、とくに両親と兄との関係を、歪みなくとらえさせるという、思わぬ強味も生んでいた。

レスターは残されている両親の手紙を丹念に整理、引用しながら、復員直後の兄の生活をあとづけてゆく

のだが、一応生涯を概観する体をとった回想記の中で、この部分が圧倒的に面白い。すでにある雑誌『中央公論』一九六二年四月号に一部を訳載したが、一口にいて、息子の反抗であり、復員兵の抵抗である。定職につこうともせずぶらぶらして、北ミシガン州の別荘に友人仲間をつれこんで、気ままな居候生活をつづける——これは二十そこそこの復員者としては、むしろ型通りの行動といえそうな気がするのですが、この際むしろ異常なのはこうした息子に対する、母親のいかにも執拗な、ヒステリーじみた所さえただよう干渉ぶりの方だ。丁度、真夏で、彼女は北ミシガンにやって来て、夫ひとりがシカゴ近郊の自宅に残って、開業医として診療にいそしんでいる。そういう夫に向かって、くり返し息子の行状に対する不満を書き送っては、あなたの口から手きびしい叱責と処分を、とせがみつづけ、ついには、息子の誕生日のお祝いのパーティの席上で、今後出入り一切さし止め、といった「最後通牒」まで手渡したりする。子供の育て方について、批判がましい口をきけた柄でないことは十分承知しているし、また時代の差、国ぶりや家風の差などの意外に

大きい点も無視しようというのではないが、こうしたヘミングウェイの母親の頑なな態度には、一種偏執的なものさえただよってはいないだろうか。

ところで、こうした出来事を、ヘミングウェイは直接にはまったく扱っていなかった。その際、書かないという一事が、彼の蒙った衝撃の深さを逆に証し立てているともいえるので、これがさきに引用した『誰がために鐘は鳴る』の一節にまで尾をひいているのではないか。いやさらには、ヘミングウェイにおける女性人物の扱い方、いわば可愛い女と、私の強すぎる、男を喰ってしまふタイプの女とに、善玉悪玉なみの割り切り方をやりかねなかったこと、とくに母親としての女性を、ほとんど描かなかった点もまた、上述の事実と結びつけてみたい気持ちをぼくは抑えかねるのだ。(登場するのは、多く子無しの夫婦であり、『武器よさらば』の女主人公、もちろん前者に属するキャサリンが、出産のため手術で死ぬ、つまり母となる前に作者の手で殺されるというのは、見のがしたい象徴的な一例だ、とぼくはいいたい。『日はまた昇る』の女主人公ブレットは、数多い気まぐれな男性関係にもかか

わらず、どうやら不妊の女と断定して間違いなさそうだし、また短編「白い象のような丘」(Hills Like White Elephants)の女性は、いままさに墮胎手術に出かけようとしている地点において描かれている。)

さて、かくまでに「パーソナル」な体臭の強烈だった作家、従って読者に対する個性の刻印も根深かった人物について、均衡のとれた伝記を物することは、むずかしい。「体臭」や「個性」をそのままに受け入れるのでは、逸話の羅列に終わるほかはないだろうし、といって、「体臭」や「個性」を潔癖に切りすてしまつては、虻蜂(あぶはち)とらずの水っぽい抽象性に立ち至るほかはない。もっとも、伝記と作品との間の探索は、今後急激に押し進められるに違いない。あまりに直線的な結びつけや一般化への飛躍さえ警戒すれば、この方面でなすべき仕事はまだ多い。とくに「私小説的」な文芸批評の伝統(?)をもつぼくらは、その弱味と強味に、あらかじめ警戒心を働かせ、同時に利用をし得る、恵まれた立場にあるといえるかも知れぬ。

この四年前の小文を読み返して、その根本の論旨に

は、今もいささかの変更を加える必要をみとめない。「伝記と作品との間」という副題をぼくはつけていたのだが、この両者に挟まれた險々な暗礁水域にこそ、難破を覚悟の上で、あえて乗りこんでゆくべきだ。この思いもうけぬ衝突や転覆の危険をはらんだ水域にふみこまずして、この作家の中にまともに突き入ることは望めない。この危険を回避しては、きれいごとの遠望に終わる他はないだろう。ぼくはつい先日、フリップ・ヤングの「ヘミングウェイとぼく」(Philip Young, 'Hemingway and Me', *Kenyon Review*, Jan. 1966)というエッセイを読み、そこに描きとめられたヘミングウェイの一面に一種異様な衝撃を受けると同時に、やはりそうだったかと、ひとりうなずかずにもいられなかった。ヤングは、一九五二年に、総体的なヘミングウェイ研究として最初の本を書いた人だが、そんな時期的な先後などよりも、この危険な暗礁水域に雄々しく船を乗り入れた開拓者としての姿勢によって際立っている。いや、姿勢ばかりか、その最初の探險の成果もまた注目すべきものがあつた。彼は、ヘミングウェイの作品の「自伝的」な特徴に着目して、そ

の観点から、いわば一貫した水路を跡づけ、全体的なヘミングウェイ海図を作成しようと企てた。とくに、一見 'pointless' に見え、剃ぎ落とした断片としか取りにくいものをかなり含んでいるヘミングウェイの短編に、鮮かな位置づけをあたえたのである。たとえば、「傷」への執着といった隠された主題を、いくつもの作品から探り出して来て、これをヘミングウェイのイタリア戦線での重傷という伝記的な事実と結びつけて考えた。といって、ヤングは、たんに作品と実生活とを直結させようと努めたわけではない。伝記的な事実という索引によつて、ヘミングウェイの作品を説きつくそうとしたわけではなかった。彼はむしろ、ヘミングウェイの小説をともに理解しようとして、そこにくり返し立ち現われる「謎」とぶつかり、その正体を納得するのに全力をつくさざるを得なかったにすぎない。あくまで、作品の鑑賞、理解の一つの試みであつた。

ところで、ヤングのこんどのエッセイは、彼の最初の著書の出版のいきさつを語つたものだが、このブリリアントな批評書が、出版に当たつて悪戦苦闘ともい

いたいほどに難航したのだ。筆者が、当時無名の青年で、出版社が難色を示したから、というのではなかった。難航の最大の、そして唯一の原因は、他ならぬヘミングウェイにあった。当の作家自身が、この本の出版に、真つ向うから反対したのである。本文引用の許可をもらふ必要もあり、内容の説明をつけた手紙を出したところ、ヘミングウェイはただちに、猜疑心と敵意をむき出しにして、つよい難色を示した。そこで、ヘミングウェイの年来の友人たる批評家マルカム・カウリー (Malcolm Cowley) にわざわざ仲介の労をとってもらいまでしたのだが、まったく効果がなかった。それどころか、カウリー自身、ヘミングウェイの敵意の飛沫をあび、無用、有害な口出しとして、絶交状をたたきつけられると同然の憂き目を見てしまったのである。ところで、ヘミングウェイのそれほどの憤慨は、つまりは作家の私生活に無用の詮索をこころみるもの、という所にあった。とくに、ヤングが 'trauma' という精神的な概念をもちこみ、ヘミングウェイの作品のうちに、自らの蒙った衝撃と傷に對する防衛の姿勢をあとづけようとした点が、とくに

瘡にさわった。おれをノイローゼ扱いして、肝心の小説までノイローゼの産物扱いしている、と憤慨したのである。そして、ヘミングウェイは、作品からの引用は一行といえどもお断わり、とまで言い出し、ヤングは出版を諦める他ないところへ追いこまれそうになった。結局は、ヤング側の執拗な粘りが効を奏して、出版にこぎつけはしたのだが、この間の難航をきわめたヘミングウェイとの交渉の経過をよんでゆくと、いわば向こう側に、思いもかけずヘミングウェイの全像が鮮かに浮かび上がってくるという思いを禁じ得なかった。抑えがたい怒りにのたうち回る巨象の姿、小うるさい詮索の鋒先に瘡をたかぶらせ、遮二無二に相手目がけて突進して、前脚で踏みつぶさずんば止まぬといった猛りぶりを思い浮かべざるを得なかった。もとより、作家の批評家に対する苛立ちや反発というのは、今に始まった話ではない。批評家を馬の尻にたかる小うるさい蠅にたとえた、あの有名なチェホフの警句から、わが志賀直哉の「無用の長物」説、「作家にそう言われても、言い返すことの出来ない気の毒な存在」というきめつけに至るまで、その例は枚挙にいと

まがない。しかし、ここに見られるヘミングウェイの昂ぶりには、たんに自作への誤解や悪評に対する苛立ち、大作家の習性となった我が儘な放言とは言い切れない何ものかがひそんでいる。そこには、何か必死な——そう、ほとんどデスペレートな身振りめいた所さもある。笠にかかった押しのけ、計算にもとづく理性的な反撃などではなく、考えるよりも先に手の方が本能的に動いて、相手を払いのけようとしたような趣きがある。ヘミングウェイは、ほとんど取り乱している。相手の何でもない申し出に、すぐもう度を失って、いかん、いかん、絶対に駄目だと、せきこんで、言いつづけている、唇さえ震わせながら——そんな感じなのだ。

ヘミングウェイは、短気で、興奮しやすく、怒りっぽい男ではあったらしい。キー・ウェスト時代に詩人のアーチボルド・マクリース（Archibald MacLeish）を案内して、海へ釣りに出かけた時、何かで口論になり、ヘミングウェイは憤慨のあまり、相手を離れ小島におき去りにして来たという話を、弟が書いている。船から下りて話の結着をつけようとヘミングウェイが

言い、船を島につけ、相手が跳び下りるや否や、エンジンをかけて逃げ出してきたらしい。お客のマクリースが見えないというので、ヘミングウェイ夫人がさわぎ出し、やつとことの次第をきき出し、あわてて救出に出かけたそうだ。また、スペインの内乱のさ中のマドリッドで、ヘミングウェイに会ったソ連作家エレンブルグ（Ilya Ehrenburg）も、顔を合わせて間もなく、ちよつとした言葉の上の誤解から、ヘミングウェイにいきなり殴られそうになった思い出を書きとめていた。しかし、ヤングの批評に対する彼の取り乱し方には、これとは異質のものがある。たんに一度ではなく、執拗に拒絶をくり返した。しよせん防ぎ切れぬと感じながらも、自分のいかにも理不尽な言い分に懸命にしがみつこうとしている。何とか自分の巢を守りぬこうという、必死の抵抗であり、自己防禦の身振りではないのか。自己防禦と思わず言ってしまったが、こうしたヘミングウェイの昂ぶって、しかも頑なな反応ぶり自体が、じつはヤングの批評的命題の実例による証明になっているではないか。過敏なまでの自己防禦が、ヘミングウェイの作品をつらぬく根本の主題だ、

というのが、他ならぬヤングのテーマであった。なんとも皮肉な成り行きではあった。相手をねじふせてでも、口をふさぐという必死の身振りが、じつはそのまま相手の言い分を裏証することとなったのだから。

いや、ぼくは、ヤングの言い分の全面的な正しさを説こうとしているのではない。死人に口なし——その上、ヤングのエッセイにも、自己正当化による歪みが生じのびこんでおらぬとは保証出来ない。まして精神分析の「外傷」理論で、ヘミングウェイの作品の「謎」が解ける、とはぼくも思わない。ただ、ヘミングウェイに関する限り、伝記と作品との間に挟まれた暗礁水域こそ、「謎」をはらんだ「闇の奥」であり、危険をともしなう代わり、これぐらい探索のし甲斐のある領域はまたとないだろう。ヤングは、この危険な水域にのりこんだ最初の航海者であり、ヘミングウェイの示した激烈な反応が、ヤングの企図の意味深さを裏づけている。ぼくらもまた、この暗礁水域へとかじを向けざるを得ないだろう——もちろん、ぼくらなりのやり方で。もつとも、ヘミングウェイの決定的な伝記は、アメリカでもまだ書かれていない。死後、相ついで出され

た幾冊かは、その軽率な断定、ぼくらにもすぐそれと判るほどの不正確さ、紋切り型の英雄化や誇張などにおいて、ぼくら愛読者にはやり切れぬ種類の代物ばかりであった。この轍は踏みたくない。といって、現在ぼくらの手に入る資料は、メアリー未亡人の神経質も働いて、はなはだ限られている。書簡集は出ておらず、もちろん日記や創作ノート（もし残されていたとして）は、全く目にする機会がない。じつの所、ヘミングウェイのエッセイ、スケッチなどの雑文さえ完全にはまとめられていないのだ。まして、生存する肉親や友人たちに面会して、聞きただしたりすることは論外である。つまり、正統的な伝記作者としてつくすべき手続きの大半が、ぼくには予め禁ぜられている。まことに粗末な軽装で、極地探険に乗り出すようなものだ、わが身を省みざるを得ない。「伝記と作品との間」にしつこくこだわったのも、一つはたしかにこのせいだが、自らの軽装備を気にしすぎて、余りに慎重に構えれば、手も足も出なくなってしまう。年譜をせいぜい挿話で色づけをした、穩健中正な頌徳表を出すことは難しい。そこで、ぼくとしては、この軽装を

逆用する道を工夫する他はなかった。身軽かつ大胆に作品自体によりそって、ヘミングウェイをかり立てていた根源的な衝動をつかみ出そうとつとめる一方で、出来る限り、外側からの、つまり他人の目に映ったヘミングウェイ像を参照し、利用させてもらおうと考えた。遠慮なく内側に突っこむと同時に、他者の目を導入することを忘れまいと願ったのである。

中西部の息子

アーネスト・ミラー・ヘミングウェイ (Ernest Miller Hemingway) は、一八九九年、七月二日、イリノイ州、オーク・パークで生まれた。その前年の一月に生まれた姉マーセリンがあり、第二子の、長男である。そのあと、アーシュラ、マドレーヌ、およびキヤロルという三人の妹、それに一九一五年生まれの末っ子の弟レスターがある。アーネストの、一番お気に入りの妹はマドレーヌだった由だが、一つ違いの姉とは、幼年時代、服装や髪格好まで、「双児同様に」育てられた、という。その写真も残っているが、母親

の好みというこの育て方は、かなり徹底していたようで、一九〇五年の小学校入学も、この二人は同時であった。その後、二人の入ったハイスクールも同じなら、入学、卒業の時期もすっかり同時であった。そこで、幼少年時代に関するかぎり、この姉マーセリンの手になる『ヘミングウェイ家で』(Marcelline Hemingway Sanford, *At the Hemingways: The Years of Innocence*, 1962) が、一番身近な証言ということになるのだが、実際にも、女らしい細部についての記憶力と、柔軟で生き生きした描写力をかねそなえた見事な回想で、アーネストの伝記の脚注ということを離れて、一個の作品としてひとり歩き出来る本である。ただし、それだけに、書き手の個性による染色や切り捨てということを考えねばならず、また身近な肉親としての配慮、遠慮が多分に働いていることも当然であろう。以下、多くをマーセリンに負いながらも、こうした点には注意を払いたい。

アーネストが生まれた当時のヘミングウェイ家は、ノース・オーク・パーク・アヴェニュー四三九番地にあり、これは母方の祖父アーネスト・ホール (Ernest

(Hall) の建てた家で、この祖父も一緒に住んでいた。

一八八〇年代に建てられた三階建てで、張り出した小塔がついており、いかにもヴィクトリア朝風な家であった。一階には赤いカーペットを敷きつめた広いパラーの他、小さい書斎があつて、夕食後には、祖父はきまつて、ここへ閉じこもつて、パイプ煙草をくゆらせた。この祖父は、朝はまたきまつて九時ごろゆっくりと階段を下りてきて、ひとりで食事をとる。ガウン姿だが、襟のかたいワイシャツに、黒いボータイは欠かした例しがない。食堂の家長席に坐つて、料理人の運んでくる、やき立てのベーコンとトーストを食べ、コーヒーをのみながら、長い時間をかけて新聞をよんだ。孫たちがわきでしずかに見守っていると、ベーコンをわけてくれたり、お話をしてくれることも多かった。何匹かの小犬を中心とする冒険物語を、何日もつづけて話してくれたこともあり、昔のシカゴ、またアイオワの農場から逃げ出した若い頃の思い出(この祖父は、田舎暮らしや百姓仕事が嫌いだつた)、さらにはロンドンで散歩の途中ディケンズに行きあつた話もあった。

このふさふさと白い顎ひげを生やした、赤ら顔の話し好きの老人は、若い孫たちには、かくべつ印象的な存在だったらしい。いかにも家長らしい、ヴィクトリア朝紳士らしい風格の持ち主で、孫たちには聖書からとった「アッパ」(父の意というあだ名で親しまれていた。当時は、まだほんの駆け出しの開業医であつた父親よりも、一層堂々と大きく映つたかも知れない。一体、妻の実家に住ませてもらうという形の同居はどうやら、若い夫の側の経済的な事情にもとづくものだったらしい。結婚当時、ほかの開業医のもとの見習いの位置から独立したばかりで、収入が月に五〇ドルということさえあつた。一方、新妻の方は、ピアノや声楽の内弟子を教え、その数が五〇人にも達して、月に千ドル近い収入を得たこともある。こうした音楽の授業のために広い部屋が必要というのが、同居の大きな原因だったようで、その点にマーセリンは全くふれていないが、当時の若い父親の心境のうちに、ある微妙な屈折を想定しても、それほど行きすぎた推測とはいえないだろう。

母方の家庭に、いわばイギリス的な落着きと余裕、